

身体障害者の居住環境

その2 移動について

若杉 幸子

1. 通院

① 東大病院の通院

私は右脳幹部にできた血管腫摘出手術で東大病院に入院し、脳外科本来の治療が終了した後、埼玉県伊奈町にあるリハビリ専門病院に転院したが、転院後、当分は眼科でその後の経緯を診てもらうため、一月に一度、転院先の伊奈町の病院から本郷の東大病院に通院する必要があった。

まず、転院先の病院から東大病院へ通院する状況を簡単に説明すると、転院時には車椅子からベッドへ自立で移動できるようになっていたの、タクシーで移動することができ、バリアフリーが徹底している病院間および病院内の移動は自力で安全かつ快適に行うことができた。

次に、退院後の自宅から東大病院の通院について説明しよう。

退院したことで介護保険が利用できることになった。

介護保険の訪問介護サービスのなかに『身体介護』サービスがあり、そのなかに『外出介助』が、また、そのなかに『買い物』、『通院』という項目があるが、私の場合、院内では自力で車椅子歩行が可能なので、この『通院』サービスをうけることはできない。私が通院のために利用できるのは、二級の介護士の資格を持つ運転手が運転する車椅子専用タクシー（通称『介護タクシー』）を利用して、車椅子を住戸からタクシーまで、タクシーから院内まで移動してもらう『乗降介助』サービス（以下、『乗降介助』と略称）である。1回につき1000円の乗降介助の費用の一例を利用者が支払い、

残りを介護保険から支払う。利用者がタクシー代の実費を負担することは、一般のタクシー利用と同じであるが、診療所などへの通院に限り、『乗降介助』が受けられるので、住戸の出入りや階下まで車椅子を移動するためだけにヘルパーの介助を頼む必要がない。

退院した私は、これからの通院に『乗降介助』が受けられると期待した。しかし、退院してすぐに、『事業所が地元の診療所へ行く場合には快く引き受けるが、東大病院のように遠くへ行く利用については断るようになった』とケアマネージャー（以下、『ケアマネ』と略称）が伝えてきた。このことを聞いて私は、遠くへの高額な移動に介護保険が利用できないことになった。利用者からタ

クシー代の実費を受け取り、他に乗降介助の費用を利用者と介護保険の双方から受け取るというこのしくみは30分以内あるいは7〜10キロメートル以内にある地元の近距離の診療所へのサービスにうまみがあるのだろう。たとえば、遠距離を走行する時間内で車を数回回転させて乗降介助の回数に見合う収入を得る方が収益が上がるかと。

私はその後、車椅子を住戸から階下まで移動するうまくい解決策を求めているいろいろ試してみた結果、費用は少し高くなるが、市指定外の事業所の乗降介助を利用することが便利であることがわかった。

また、これを利用する場合、自分で予約するので、ケアマネへの手続きが省略でき、そのうえ、病院での待ち時間の料金について明確な返事が即座に得られ、また、料金の精算が当日行われるため、後日集金という手間が省けるなど、利用者にとつて大きな利点があることもわかった。

移動については以上であるが、バリアフリーが徹底している東大病院への移動の1日は、自立した診療が安全に終るというだけでなく、さまざまな面で快適な時間が過ごせることもわかった。

たとえば、東大病院では車椅子でも売店でサンドイッチや弁当などを買って昼食をすませたり、郵便局で必要な振込みをすませたり、キャッシュカードで現金を安全に引き出せたり、肌着や簡単な化粧品や文具などを買えたり、理容店で髪を切つて

帰ることができたりするのである。

このように東大病院の環境は、私にとつては小さな単位のバリアフリーの街、便利な『ミニチュアの街』『ミニタウン』であり、私に「バリアフリーの環境があれば、自力でこれまで通りの生活がおくれそうである」という将来の生活に対する漠然とした希望を抱かせた。

②地元の診療所の通院

地元の診療所を利用するときの状況は次のようである。

介護保険における診療所内の移動の介助については、基本的には診療所で行うことになっており、通院介助を受けられる介護度を有する高齢者以外は自力で通院することになっている。私も同様であり、通常は「乗降介助」を利用して通院している。

ただ診療所内の移動の介助を診療所が行うことになっているとはいえず、地元の診療所のバリアフリーの状況はさまざまなので、予め電話を入れて診療所の様子を知っておく必要はある。

また、通常は「乗降介助」を利用しているが、緊急の場合は、ケアマネに介護タクシーの予約を入れて

もらうことは難しいので、市指定外の事業所を利用するなど、手続き面で簡便かつ確実な方法の場合に応じて使い分けている。

市指定外の事業所を利用すると、通院介護に限定した利用のみでなく、デイサービス、デイケア、ショートステイにおける送迎、食事や買い物、スポーツや演劇鑑賞など、地域で生活するために必要な移動全般のサービスが受けられる。また、利用者はケアマネを通じて従来の面倒で不確実で時間のかかる手続きを経ることなく実質的に同様の利便を受けることができる。そして、なんといつでも移動方法に苦慮するストレスから開放されることが最大の利点である。

2. 通院以外の外出

①食材・雑貨、衣料品、医療品などの買い物

介護保険制度では、ヘルパーに買い物をお願いすることはできる。通常の日用品であれば買い物内容に制限を受けることはないという。

私自身が買い物をするのについて、前述の『東大病院への通院』のところで説明したように、介護保

険の訪問介護サービスのなかの『身体介護』サービス、そのなかの『外出介助』、そのなかの『買い物』サービスを利用すればできると当初考えていた。

しかし、以前利用していた事業所のケアマネから、スーパーのなかで車椅子で自立歩行が可能ならば、「ヘルパーに車椅子を押してもらって、利用者自身が買い物をするのではできない」と言われたことがあった。それ以来ずっとそのことを守ってきたので、自分が食べる食材について品物を手にとって自分で選択したことは全くない。今は食材についてはすべて生協の個別宅配をネットで、また、他のものについてもおおむねネットで購入している。

②銀行や郵便局での現金の引き落としや振込みなど

現在訪問介護サービスを利用している事業所では、ヘルパーが車椅子を移動して、銀行や郵便局やキャッシュカード機のある場所に利用者を連れて行くことはできない。また、利用者から頼まれてこれらの場所で行金を出し入れすることはできない。

自身の身体障害者は、このような用事をすませるためには、どのような方法があるのか。銀行員や郵便局員などが自宅にまわってくる方法を利用するのがありだろうか。

私は、前述の通り、東大病院に通院する限り、あの便利な『ミニタウン』を利用するつもりでいる。

③美容院へ

「身体障害者が髪をカットするにはどういう方法があるのか」ということが退院後の次の疑問であった。

転院先の病院に入院していたころ、外出届を出して、自宅に帰ったことがあり、その機会を利用して、友人に車椅子を押してもらって美容院に行ったことがあったが、それが美容院に行った最初であった。

美容院までの歩道と車道との間はバリアフリーではないため、介助者がいなければ自力では車椅子を移動できない。美容院はかなり蹴上げの高い階段が1段あったため、友人と美容師が2人で車椅子を持ち上げてフロアに上げた。

介護保険ではヘルパーが利用者をもつて美容院まで送迎することはできない。

退院後しばらくして私は、住戸の外に環境が全くバリアフリーでないときに、介護保険を利用して身障者が自力で髪をカットする方法は次のようであることを知った。

一つは、利用するデイケアの利用日に、デイケアの施設に理・美容士が来る場合、それを利用する方法がある。二つは、介護保険の要支援・要介護認定の結果が、要介護3以上の高齢者に1年に4枚配布される『理・美容券』を利用して自宅まで出張してもらう方法がある。三つは、要介護2以下の人の場合、ケアマネに理・美容の出張事業所を探してもらい、自分で電話連絡し、都合の良い曜日や時間帯を予約して、自費で出張サービスを受けるという方法がある。

これらはいずれも介護保険を利用した方法であるが、介護保険を利用していない身障者はどのようにしているのだろうか。

④外で食事する、お茶を飲む
通院以外の外出に対する支援は介護保険制度では皆無である。

外でお茶を飲む、あるいは食事するなどの外出に対する支援はない。

たとえば、高齢者に限ったとしても、税金で賄う生活支援の範囲に『外でお茶を飲む、あるいは食事をする』という生活はいれられないということであろう。

身障者で車椅子生活者に対する生活支援はどのようになっているのであろうか。

ちなみに、私は、退院後2年くらいの間で、東大病院以外の外出先で食事やお茶を飲んだのは、友人の介助を受けて参加したある会合での1回と、ごく最近(06年7月)友人に連れ出してもらってでかけた機会の合わせて合計2回である。

⑤働きに出る

病気になる前の仕事は、フリーの都市計画コンサルタントであり、その他に非常勤講師として短大などで教えていた。

常勤の教諭が病気になるた後に車椅子で教職を続けることは問題ないであろう。しかし、非常勤職を募集する際、身障者を採用することになると問題は別であろう。

仕事の問題は私自身の労働の体制や能力と雇用者側の条件であろうか。後者については通勤の際の交通

費支給の条件が大きいように思う。

私は公共交通機関を利用する健康者と同等の条件で通勤することはできない。しかも、たとえば、タクシー利用などそれ以外の交通手段を利用する場合、雇用者がその費用を負担することを承諾するとは思えない。前者の私自身の労働の体制や能力とは二つ考えられる。

一つは言葉によるコミュニケーション能力である。このことは構音障害の克服という課題であるが、構音障害の克服についてはリハビリ如何であり、これについてはあまり心配してはいない。数年先には、聞き取れる程度に回復するであろうということが私自身おおむねわかってきたからである。

二つ目は移動に要する経済的な負担能力であり、これが大きいと思う。仕事先までの移動に関して負担可能な公共交通機関を利用できるまでに歩行が改善されるか、外出介助の負担の軽減が図れるかが課題である。

仕事先までタクシーで行く場合、あるいはボランティアの介助者がついて杖で歩行して公共交通機関を利用する場合、それらに要する経済的

負担と仕事の報酬とがトントン(プラス・マイナス・ゼロ)であればよいが、持ち出しでは長続きしないであろう。

以上から考えると、従来のような家族や地域から離れて他者に雇用されて常勤で働くという形態は難しいかも知れない。

歩行の改善については私の自助努力と回復の可能性にかかっているのが不確かであるが、外出には杖であれ車椅子であれ、介助者が必要になるので外出介助の負担の軽減化についてその方策を調べる必要があるだろう。